



(静岡)

静岡・小川城遺跡こがわじょう

1 所在地 静岡県焼津市小川

2 調査期間 一九七九年(昭54)一〇月～一九八〇年(昭55)三月

3 発掘機関 焼津市教育委員会埋蔵文化財調査事務所

4 調査担当者 山口和夫・丸山博信

5 遺跡の種類 中世城郭(居館)跡

6 遺跡の年代 室町時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

小川城遺跡は古くから中世居館址として知られており、城の内遺跡として静岡県遺跡地図に登録されている。長谷川氏五代が居住した小川法永長者敷跡と伝えられ、長谷川正宣の時、今川家の内紛の折に北川殿と竜王丸(後の今川氏親)がここに難を逃れ、北川殿の兄、伊勢新九郎長氏(後の北条早雲)の努力により竜王丸は駿府にもどることができたとい

う。

地籍図にはかなり明確に遺跡の広がりや構造が遺されており、調査はこの地籍図をもとにトレーンチを設定して遺跡の正確な輪郭を明確に示す結果までは得られなかつたが、中世居館址を解明する上で多数の貴重な資料が得られている。

遺構としては内側を階段状に構築した堀が検出されている。堀の上幅は約20m内外で、ほぼ長方形に巡っている。西・南・北側の堀は現地表から約2mと深く、東側の堀は約1mと浅い。地質的には、西から東へ伸びる自然堤防が大きく北側へ張出しL字形になった自然堤防の曲がっている部分と後背湿地とに立地している。地形に制約を受けたのか、地形を利用して築造したのか、現在のところ明確に判断するには資料不足であるが、西・南・北側の堀では絶えず水が存在し、東側の浅い部分で水量の調節排水をしていたと考えることもできる。そうとすれば自然地形を巧みに利用した築造ということになる。南側には堀に直交する溝状の落込みをトレーンチ断面に見ることができ、水の導入用の施設かと思われる。しかし、地下水位が高く、1mも掘ると水が湧き出してくる地域で水の導入水路が必要であったのか疑問も残る。従つて堀は、居館を防禦する目的だけでなく、水田地帯の灌漑排水用のための溜池としての機能も果たしていたとも考えられる。いずれにしろ、中世居館址の構造を解

明する上で基本資料となり得る遺跡である。

8 木簡の釈文・内容

当初の予想を上まわる多数の木製品が出土した。梵字の書かれた木片、朱書きの鶴が描かれた漆器類、曲物類等、中世生活史を解明する上で貴重な資料が提供されている。その他には洪武通宝などの古銭が五枚出土している。木簡については、北側の階段状の堀の内部上層から出土したものである（解説には向坂鋼二氏の御教示をいたただいた）。

『但馬国分寺木簡』の刊行

外溝から三六点の木簡が出土している。すでに第三回木簡研究集会で報告されているが、昨年十二月兵庫県日高町教育委員会から、その正式報告書が刊行された。但馬国分寺木簡は、これまで国分寺跡出土の木簡として唯一の例である上、内容的に興味深いものを含み、ただに但馬国分寺研究のみならず、国分寺研究にとって貴重な史料となるものである。年代は神護景雲年間で、文書・荷札・習書などを含み、同時期の同寺の具体的な活動が知られるが、特に同寺の諸施設を記したものは同時期の造営状況を明らかにできる点で興味深い。これまで諸国国分寺の中で時期を限つてその造営の状況が知られる例はなく、八世紀後半における国分寺の成立の問題を考える上で大きな意義をもつている。報告書は、釈文・図版をのせ、総説では前に述べた問題を論じている。さらに参考資料として、墨書き土器と他遺跡出土の但馬国関係木簡の集成を付載する。

但馬国分寺跡発掘調査団編『但馬国分寺木簡』(A四版 本文

三三貢 コロタイプ図版(一四葉) 頒価二千円 送料四百円
△申込先▽真陽社 ▽六〇〇 京都市下京区油小路仏光寺上ル

振替口座 京都七八二六七



•「天形星王大日如來」
燒津市教育委員會『小川地區遺跡分布調查概報』

9

『小川地区遺跡分布調査概報』

(原川 宏・山口和夫)
一九七九年

天形星王大日三二七

形星王大日三二七

藥師如來